

## チュニジアの政変によるマグロ漁への影響と漁業技術協力

2011年5月10日

高杉 重光

投稿

真道重明のホームページ 水産雑記（その4）

### 1.チュニジアの政変

今年1月に発生したチュニジアの政変は、近代化の裏で民主化を無視し、強引な支配を続けた政府への国民の不安と怒りが燃え上がったものだった。それは失業対策や政権の腐敗に抗議する市民のデモに警官隊が発砲し、多くの死者が出て、市民の怒りが引き出された。

そして、チュニジアを23年間、政権を率いていたベンアリ大統領は、政府批判デモの中、国外に脱出した。

チュニジアは地中海を背景にした世界的なカルタゴの遺跡が有名で、1956年、フランス保護領から独立し、紛争やテロがはびこる中東では、政治的にも安定している国と見られて来た。

イスラム教徒が大半の国でありながら、一夫多妻制を廃止し、女性の社会進出を勧めるなど、欧米よりの近代化政策をとった。パレスチナ解放機構の本部が置かれた。公用語はアラビア語だが、フランス語も広く普及している。

今回の政変では、多くの市民がインターネットを通じて、デモ開催や警察の取り締まりを巡る情報を共有。デモの参加者は雪だるま式に増えていった。

チュニジアの政変に端を発する中東での市民デモはエジプトに波及し、その連鎖は止まらず、リビア、イエメン、イラクと続いたほか、バーレーン、モロッコやジブチ、アルジェリアなどにも飛び火。中東、北アフリカ全土に広がっている。図を参照。

### 2.地中海クロマグロ漁による日本への輸出動向

地中海沿岸諸国に波及している市民デモによる政変は、今後の地中海におけるクロマグロ漁業にも影響してきている。

2010年11月19日付け朝日新聞記



事によると、EU27 カ国は 11 月、大西洋まぐろ類保存国際委員会(ICCAT)年次会合で、クロマグロの 2011 年の漁獲量枠について、大幅な削減は求めないことで一致した。

それより以前、クロマグロ保存の急先鋒である EU の欧州委員会は、資源回復をより早く達成するために地中海を含む東大西洋での 2011 年の総漁獲量枠の大幅減の要求方針を加盟国に提案したが、仏、スペインなどの漁業国の強い反発により、結局、大幅削減は求めないことで一致した経緯があった。

ところが、11 年 3 月 4 日付け同新聞記事によると、争乱の続くリビアが、2 月下旬にあったクロマグロ保存をめぐる ICCAT の会合に欠席していたことがわかった。クロマグロ漁は漁獲が割当られていても、実施においては会議の承認が必要であり、そのため、地中海全体の約 7%の漁業枠を持つリビアは今季の漁が難しくなっている。

会議には、ムバラク政権が倒れたエジプトも欠席した。チュニジアは出席したが、政権崩壊の為、例年通りの漁獲は困難とみられている。このようにいくつかの割当国による漁の実施が難しくなっているため、日本への輸入が減ることが予想され、気になるところである。

### 3.チュニジアへの漁業技術協力

チュニジアはクロマグロの回遊ルートに面しており、六月になると設置される定置網で漁獲されている。同国の要請を受けて、国際協力事業団(JICA)による国立漁業センタープロジェクト(1978/12-1982/12)が同国中部の都市マディアを基地にして実施された。

プロジェクトは、講習所 41 回の江又貞次氏をチーフとする、本人も含めて複数の専門家(5 人)が派遣され、漁具や関連機材が供与され、協力隊員も加わって、マグロ延縄、旋網とトロールの各分野の漁業開発・普及が実施された。また並行して水産高校の教員等に対する再教育・訓練が同地の漁業訓練施設で行われ、延縄乗船実習では訓練に耐えられない参加者が出て、難しいときもあったが、約 50 名の参加者に対して上記 3 分野についての座学、漁具製作等の実習と乗船実習を 10 名ずつ、6 ヶ月期間のコースで 5 回計画に沿って実施した。

開発・訓練に使用された船はおもてデッキの約 70 トンの現地船であり、不自然な位置にラインホーラーが設置され、苦勞して延縄漁が行われたが、300kg のクロマグロが漁獲されたときにはチュニジア関係者は大いに興味を持った。当時定置網で漁獲されたクロマグロは缶詰に加工されて、クスクス料理などに使われていた。

このプロジェクトが始まった頃のチュニジアでは、フランスとは密接な関係であるが、日本については殆ど知られていなくて、現地人には中国の一部くらいにしか思われていなかった。しかしカウンターパートや関係職員により協力事業を通じて次第に知られてきた。

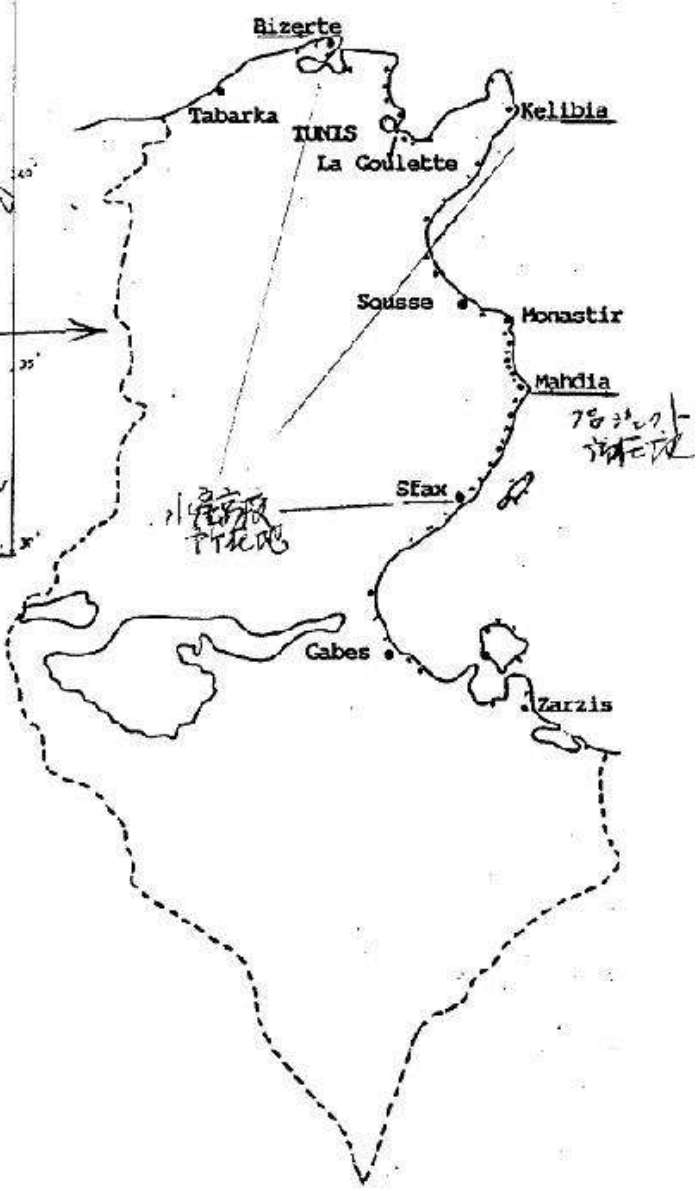
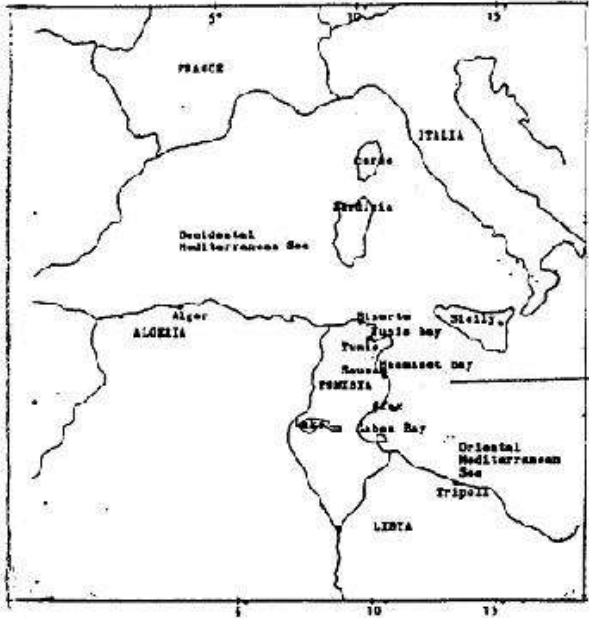
その後、湾岸戦争開始前の時期に、沿岸漁業者一人と共に2度目に派遣(1990/9-1993/9)された漁業改善指導では、国立海洋・漁業研究所に配属され、沿岸漁業基地でのイルカの駆逐や漁労機器の導入指導を行っていたが、刺網で捕れたシャコなどが食用にされず、捨てられていることを知った。この時期に漁大1回吉川明夫氏(地中海マリーン代表)がクロマグロの畜養指導のため当国を訪れており、この頃から定置で漁獲されたクロマグロの畜養が始まり、日本に空輸されるようになった。

その後も水産に関する協力要請があり、間隔を置いてプロジェクトは実施された。当初供与できなかった調査・訓練船も供与されて有効に活用されていると聞く。

湾岸戦争の頃から開発途上国での治安が次第に悪くなってきて、2002年11月、安全管理調査のためにJICAからの3回目の派遣になった。そこで感じたことは、日本による協力がよく知られており、多くのチュニジア人に感謝されていることであった。なお、当時プロジェクトに加わっていた漁業協力隊員はその後モロッコやモーリタニア等の仏語圏の専門家として派遣されている。

今回の東日本大震災に際して「海外からの支援が先進国からだけでなく、開発途上国からも多いのが特徴」との記事が11年3月29日付け朝日新聞にあったが、これは途上国に対する日本による援助の成果の現れであろう。

Map of Turusia



国土面積：165平方km  
 人口：7,500,000  
 海岸線の長さ：1,250km  
 チュニジア産魚の輸出先：  
 仏、伊、日、スペイン  
 漁民数：60,000  
 年間漁獲量：100,000トン  
 漁船数（無動力を含む）：9,000  
 年間の魚消費量 11.5kg/人